



1983-12

No.183

【表紙】

合唱

「第九」の舞台

解説は21ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

# もくじ

## 文化財科学雑感

坪井清足 4

### 随想

見なければわからない

妹尾河童 8

ニューヨークにおける絵巻物展について

渡辺明義 9

「日本語教育映画基礎編」30巻完成

国立国語研究所日本語教育センター 13

### 文化庁ニュース

日本芸術院新会員の紹介 16

昭和58年度文化財行政基礎講座 18

昭和58年度埋蔵文化財

保護行政に関する連絡協議会開催される 18

重要文化財（建造物）の新指定 19

重要文化財建造物

旧帝国奈良博物館本館保存修理工事竣工 21

昭和58年度

「こども芸術劇場」及び「青少年芸術劇場」に係る

沖縄公演及び離島・へき地公演実施計画 22

公立文化会館運営研究協議会開催さる 23

### 展覧会

特別陳列

海北友松とその周辺 24

新設法人紹介 (社)創玄書道会 25

(社)全日本愛鱗会 25

地域文化活動紹介シリーズ⑧ 長野市 26

国宝鑑賞シリーズ⑦ 28 国立劇場ニュース 31

## 随 想

# 見なければ わからない



お 尾 河 童  
の 妹

(舞台美術家)

という、相手は、ナードタという顔をしながら、

「てっきり、あれを描いておられるものと思つて、ずっと尊敬していたのですが・・・」

急にぼくの株は下がることになるが、嘘をつく訳にはいかないから、しかたがない。

舞台美術家という職業があることが、世の人々に知られるように、やっとなつたという

感があるので、こんな機会には、できるだけ面倒がらずに、説明するようにしている。

「建築家という人が、直接ビルや家を建てる

工事をしないでしよう。でも設計図がないと

建築できませんよ。それとよく似ています。

舞台のうえに建てられる舞台装置も、舞台美術家が描くデザインによって、初めて製作される訳ですから」

そこでやや株価が落ちますらしい。

「という、設計図を描くとか？」

「もちろん。寸法がわからないと、製作できませんから。図面だけではなく、色を塗った絵

や、舞台の各場面のイメージを描いたスケッチなども添えたりします。それぞれの舞台美術家によって、少し方法が違つても、基本的

にはみんなそうしています。デザイン画だけで表現できないものは、模型をつくったり、

なんとかして、こちらの考えているイメージを伝えるために、いろいろ手法を工夫して使

うわけです。

さつき建築家と似ているといいましたが、違つところは、製作してくれる人達にイメージもつんでもらうことが、舞台装置を作

る上で重要なことなのです。

建築工事と違って、制作に従事してくれる人達にも、イメージをふくらませて創造に参

加してもらわないと、いい舞台が創りだせないからです。つまり、図面だけでは表現でき

ないし、図面通りにつくつてもらうだけでは、十分ではない訳です。

舞台は舞台の上で演ずる人達のチームワーク

だけではなく、裏の人達のチームワークも

作品の成果を左右する大事な要素ですから」

「なるほど、やっぱり大変なお仕事なんですねえ」

チームワークが大事だ、といったことが、聞く人を妙に感心させるらしいが、それは、

別に舞台装置を作るにかぎらず、どんな分野の仕事にでも、当てはまることだと思つ

たので、照れてしまふ。

話をつづけていると、さらに感嘆の声をあげられるのは、次のあたりである。

「舞台には、何が出てくるかわかりませんが、日頃からあらゆることに興味を持つように心がけ、百科辞典的な知識をもっていることが望ましい職業だといえますね」

百科辞典とは、少しオーバーな表現ではあるのだが……でも、大ボラではない。

例えば、イタリアとドイツの窓はどう違うか？ さらに同じドイツのなかでも、地方によつてどう違うか？ などの微妙なことは、

必要に迫られ慌てて調べようとしても、間にあわない。調べに出掛ける時間の余裕があつたとしても、遠く離れた土地へ行くには大金

「舞台美術家というのは、どういう仕事ですか？」

と聞かれても、べつにガククリはしない。世間の人々に、それほど知られている職業とは思っていないからだ。

舞台で、一緒に仕事をしている仲間のはずの出演者から、

「大変なお仕事ですね。舞台一杯の、あんな大きな絵を描かれるなんて！」

と、やたらに感心されたり、労をねぎらわれたりするところが、よくあるのだから。

「いえ、あれはですね、ぼくが描く訳ではなく、大道具画家という専門の絵描きさんが、

描いてくれるんです。」

がいて。そんなことが気楽に出来るほど、舞台関係の仕事をしている者は豊かではない。

だから、もし海外に出られるチャンスでもあれば、その機会と期間を、徒や疎かには過ごせない。そのときこそ、日本の国内でどんなに本で調べようとしても、不可能なことを吸収し、少しでも百科辞典の人間に近付こうと、あらゆる事物に興味を持ち歩きまわる。

それは観光旅行とは違うから、実にシンドイ旅であるのだが、背景に仕事からの欲求があるだけに、充実感がそれを支えてくれる。

『文化庁派遣の在外研修』で、ヨーロッパに行かせてもらった期間は、その充実感に満ちた一年間であった。それは、1971年から72年にかけてであったから、今から十二年も前のことになるが、実に幸せであった。

文化庁では、

「研修地を一応三箇所ぐらいに決めて、そこへ行つてほしい」

ということであったが、ぼくは、「舞台美術家として、海外に研修に出してもらえぬのなら、各地を歩き、実際にこの目で勉強してくることを許して頂きたい。飢えを癒すために、ひたすら食べ、乾きを癒すために、ひたすら水を飲む、という感じの旅をしたいのです」

といい、その理由を説明した。

他のジャンルでは、一箇所に定住して研修を受けることが望ましい、というものもあると思うが、舞台関係の研修は、じつと動かす一箇所で、レッスンを受ければいいという

職種ではないからだ。

幸いなことに、そのことをよく理解していただけ、出発に際し、文化庁長官が、

「固く考えなくてもいいんだよ。あまり各自が勝手に歩かれても困るので、一応の規則を作つてあるが、研修の本来の意味や目的が生かされるのなら、むしろ大いに歩いていらいっしやい。そのほうが、国の出す金も生きるというもんで。定住しないで歩き回るのは、金が足りないかもしれないらんが」と、

と、いつて下さった。

確かに、旅をし移動すると、出費が多く、キツカツタ。でも、その辛さを上回る多くの収穫があった。

帰国後十年をとおくに越えたが、今なお、『文化庁在外研修』のときの旅で得ることができた知識が、生かされる機会が多く、そのたびに感謝の念を新たにしている。

最近の例では、『リリー・マルレーン』というミュージカルで、ヨーロッパ各国の都市が二十場面も出てくる舞台のデザインを担当した時など、その感を強くした。

登場する主役の、ララ・アンデルセンという人物は、実在の人で、ヨーロッパ各地を実際に点々としている。舞台装置でそれを表現することが、重要な意味をもっていたからである。それを表すのに、全国各地の窓やドアの形の違いで表現する方法をとった。

おかげで評判もよく、任を果たせたようだが、もし、あの一年間歩かないで、じつとしていたら、このデザインは生まれなかつたら

うと思う。また、せつかくの『在外研修』も成果を結実させることもできず、大袈裟にいうと貴重な国家予算の無駄遣い、ということになったとも思う。

『文化庁の在外研修制度』は、諸外国でも感心された素晴らしい文化行政の一つであり、我が国が自慢できる制度である。

ぼくが、最近気になることがある。

このせつかくの制度が、各種のジャンルを問わず、一律に研修地を一箇所に固定させ、動かしては困る

という、厳しいものになってきていると聞いたことだ。

『移動を禁止する』というのは『派遣員の実態掌握と管理責任上の問題』や『観光旅行と誤解される恐れがある』と、いうことなどの配慮から生まれたものだと思う。

しかしそれは、研修員の自覚に強く訴えることで、防げるのではなからうか？

ぼく自身のことでは考えてみると『在外研修』のおかげで、いまの仕事が出来ている部分があまりにも多いので、運用の面でも、この制度に、もつと新しい生命を吹き込んで欲しいと、思うこと切である。

『文化庁の在外研修』で、各国を歩くことの効用』に疑問をお持ちの方には、実際の舞台を見て頂く他はない。

幸い『リリー・マルレーン』が再演されることになっている。三月から日本各地を巡演し、東京へは六月に帰ってくる。是非それを見て頂きたいと思う。

編集後記

○今月の三日に恒例の秩父夜祭を見る機会を得ました。埼玉県西部の秩父盆地に三百年來伝わるお祭り、大きな山車が町並みを曳き廻わされるのが呼び物となっています。

○豪華に飾られた二十トンを超える鉦や屋台が木の車輪を軋ませて古い町家やバチンコ屋などの軒すれすれに通ると、道端や民家の二階を埋め尽した観衆から大きな拍手がわきましました。

○お神酒を頂きながら地元の古老から祭りの保存する苦勞を伺いました。このようにして多くの人々の熱意に支えられながら、土地の生活に深く根ざした笠鉦、屋台は京都祇園祭の山鉦や飛騨高山祭の御車山などと共に国の重要民俗文化財に指定されています。

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課  
TEL(03)2681-2141(代表)

「文化庁月報」十二月号

(通巻第一八三号)  
昭和58年12月25日印刷・発行

編集文化庁

〒100東京都千代田区虎ノ門3丁目2番2号  
発行所 株式会社 きょうせい  
本社 千代田区中央区銀座7丁目4番12号  
営業所 千代田区新富区西五軒町52番地  
電話(03)2681-2141(代表)  
振替口座 東京 九一六二番  
印刷所 佛行政学会印刷所

定価 一八〇円(送料四五円)  
年間購読料 二、一六〇円(送料共)